

## 令和4年度 後期卒業式 式辞

夙川の風景に微かな春の訪れが感じられる今日のこの佳き日、PTA会長様をはじめ、ご来賓の皆様、保護者並びにご家族の方々のご出席を賜り、ここに令和4年度兵庫県立西宮香風高等学校後期卒業証書授与式を挙行できますことを心から感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました191名の卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。教職員一同、心よりお祝い申し上げます。今日の日を迎えるまでに、みなさんには、並ひととりの言葉では言い表すことのできない様々な出来事があったことだと思います。それらの日々を乗り越えてきたみなさんの努力に対して、深い敬意を表したいと思います。

保護者並びにご家族の皆様、本日は誠におめでとうございます。このハレの日を迎えられたことに、感慨もひとしおのことと存じます。また、この場をお借りいたしまして、これまで本校にお寄せいただきましたご支援、ご協力に深く感謝を申し上げます。

さて、私たち西宮香風高校が「多様性」を大切にしていることは、折に触れ話をしてきました。社会全体もまた、多様性を受け入れることの大切さに気づき始めています。けれども同時に、閉鎖的・排他的傾向を帯びる人間関係のあり方や、寛容さを失い、自分にも他人にも厳しすぎるという社会のあり方が深く根を張っていることも事実です。そのような社会に船出するみなさんに対して、今日はある二人の素晴らしい表現者の言葉を紹介して、はなむけの言葉といたします。

一人目は赤塚不二夫さん。昭和の時代、数多くのヒット作を生み出した漫画家です。その赤塚さんの代表作が『天才バカボン』です。作品の中で登場人物である「バカボンのパパ」はこう語ります。

「わしは バカボンのパパなのだ  
この世は むずかしいのだ  
わしの思うようにはならないのだ  
でも わしは大丈夫なのだ  
わしはいつでもわしなので 大丈夫なのだ  
あなたも あなたで それでいいのだ」

赤塚さんと親交のあったタレントのタモリさんは、バカボンのパパを通して語られる赤塚さんの思想についてこう述べました。

「赤塚不二夫の考えは、すべての出来事、存在をあるがままに前向きに肯定し、受け入れることです。それによって人間は、重苦しい意味の世界から解放され、軽やかになり、その時その場が異様に明るく感じられます。この考えを赤塚不二夫は見事にひとことと言い表しています。すなわち、『これでいいのだ』と。

もう一人は谷川俊太郎さん。今年92歳になられる、現代日本を代表する詩人です。谷川さんはあるインタビューの中でこう述べました。

「今は、意味偏重の世の中になっています。誰でも、何にでも意味を見つけたがる。意味を探したがる。けれども、意味よりも大事なことは、『何かが存在する』ということ、『ある』ということなんです。存在するということを、言葉を介さずに感じるのがすごく大事で、生きているうえで、意味づけしないでじっと見つめる、じっと我慢するということはあるんです」と。

ここでいう「意味」とは、たとえば役に立つとか立たないとか、美しいとか美しくないとか、そういうことです。赤塚不二夫さんの「これでいいのだ」も、谷川俊太郎さんの「意味づけしないでじっと見つめる」も、役に立つとか立たないとかではなく、美しいとか美しくないとかでもなく、そうした意味から離れ、ただ存在すること、存在そのままの価値を認め、肯定している点で、実は同じことを言っています。

ではこの世界で最も確かな存在とは何でしょうか。

それは他ならぬ、今ここにいる自分自身です。

高校卒業後のみなさんの人生は、これまで同様、決して平坦な道ばかりではないでしょう。その道のりを歩いていくみなさんには、自らをあるがままに前向きに肯定し、受け入れる心をどうか大切にしてほしいと願っています。意味から離れ、「ただあること」の価値に気づくことは、究極の優しさであり、強さであり、時に人はそれを愛と呼びます。どうか、自分を愛してください。自分を愛する心を大切にしてください。その自分を愛する心こそが、他人を愛し、世界を愛する心につながっていくのです。そのようなみなさんの歩む未来には、互いの存在を認めあう、すなわち愛しあえる人との出会いが待っています。そう、信じています。

みなさんの前途が明るく、幸多いことを心からお祈りして、式辞といたします。

そして最後に、もう一度言わせてください。「卒業おめでとう。これでいいのだ」

令和5年3月3日

兵庫県立西宮香風高等学校

校長 谷口 暢謙